

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4092300088		
法人名	社会福祉法人 南八女福祉会		
事業所名	グループホーム春の山		
所在地	福岡県八女市上陽町北川内182番地1		
自己評価作成日	令和6年12月19日	評価結果確定日	令和7年3月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡県福岡市南区井尻4-2-1 関ビル1F	TEL:092-589-5680	HP: http://www.r2s.co.jp
訪問調査日	令和7年1月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

グループホーム春の山では、毎朝のミーティングで、両ユニットの情報共有や職員ひとりひとりの役割・目標を確認しあっている。確認しあうことで、忙しい中でも個別のサービスが実施できたり、全体を見て判断できたりと、充実した1日や事故予防につながるようにしている。
五つの基本的ケアを徹底できるよう日々話し合っており改善を行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2ユニット型グループホーム「春の山」は、自然の豊かな山あいに位置するが、比較的交通量の多い道路に面し、隣には協力医療機関、徒歩圏内に大型園芸店や、土曜市の開かれる出店場所などがあり、外出や地域との交流にも適した環境である。母体の「社会福祉法人 南八女福祉会」は、八女市内にもう1ヶ所グループホーム(デイサービスと温水プールを併設)を運営する。開設後12年になるが、ここ数年のコロナ禍がようやく落ち着きを見せ始め、今後ますます地域とのふれあいを充実させようと努めている。職員は日々のケアの上でも情報を共有、医療機関との連携体制も築かれていて、家族を含めた信頼関係をもとに支援を広げている。残存能力や意欲次第で、自分のできる事は自分で行い、家庭的な雰囲気の中で、日常生活が楽しくなるような工夫を行っている。研修を通してのスキルアップにも前向きに取り組み、実践に結び付けており、今後の展開が楽しみな事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の名札には理念を貼っている。毎朝、ミーティングで理念の唱和をしている。ひとりひとりのあるがままを受け止め、という部分はとても重要で、その部分の受け止め方が上手な職員がいて、見習いたいと実行している職員が多い。	「一人一人のあるがままを受け止め、意向に沿った生活を支援します」の事業所独自の理念を、施設内の掲示や唱和を通して、また模範となる職員の振る舞いから刺激を受けることで、職員全員も意識をして行動しており、定着している。この理念に基づき、年度替わりの3月末に、職員が個別に1年間の行動目標を立てるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的な交流はできていない。近隣の方のおかげで事故予防につながったケースがある。	職員が、地域の方と気軽に気持ちの良い挨拶や会話ができるように心がけており、そのおかげで離設した方の事故が未然に防げたケースがある。年1回の敬老会は、家族の参加もあり、楽器演奏などのボランティア利用などで喜ばれた。毎朝の玄関前の清掃や、退去された方の家族が立ち寄ったり、という事もあるなど、できる範囲で地域との交流を図るように努めている。	以前は、年1回の「福祉の集い」、上陽町の地域の秋祭りなどへの参加もあった、と聞きます。今後、公園での花火、幼稚園や学校との交流、ボランティアの方の定期的な受け入れなど、交流の機会が増えていくことを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議にて事例を報告する機会をもうけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、入退居状況・ヒヤリハット報告・事故報告を毎回行っている。また、身体拘束はしていないが、苦慮している事例などを報告し、意見をいただいている。運営推進会議前後は職員会議で内容の共有を行っている。	開催は定着しており、行事(避難訓練、敬老会、身体拘束適正化検討委員会等)と同日開催にするなど、会議の出席者(家族、民生委員、児童委員、役場職員、包括職員ら。駐在所の方が参加することもある)、が、行事にも参加できるように取り計らっている。会議では、現在の取り組み状況や今後の活動計画等を報告し、参加者からの意見・要望等をサービス向上に生かしている。また、議事録は玄関にて閲覧を行い、不参加のメンバーには郵送している。運営推進会議を、事業所の発展に結び付く有意義な場と捉えている。	家族の参加にばらつきがあるようですが、行事に組み込んだり、駐在所の方の意見が聞けたりと、趣向を凝らして内容の充実を図っており、多くの方の出席を期待したいところです。調剤薬局の方の薬についての説明や、歯科の口腔ケアの勉強会とか、昼食やおやつを試食などはいかがでしょうか。さらに様々な意見が出て、サービス向上に役立つ会議となることを希望します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から密な連携はできていないと思うが、運営推進会議では意見をいただくことができている。 事故報告書の提出時には提出だけで終わらず、その場で内容の確認をしていただき、曖昧な部分などの確認ができている。	日頃から行政へ運営に関する報告・連絡・相談を行っており、行政と共にサービスの質の向上に取り組んでいる。保護課とかかわりもある。包括支援センターとの交流もあり、空き情報の確認や、運営上で困っている事、加算や対応などについての疑問点の相談を行い、アドバイスを受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は施錠せず開放している。 道路沿いの建物であり、玄関を出たら事故にあう確率が高いことから、予防が重要であるため自動ドアを手動にしている。 五つの基本的ケアを職員会議やミーティングでとりあげて話し合う場をもうけている。 身体拘束適正化検討委員会は、運営推進会議と一体的に開催しており、困難事例や対応に苦慮している事例などを報告している。	5つの基本的ケア(起きる・食べる・清潔にする・排泄する・活動する)を念頭に、離設したり、手が出たり、といった傾向のある方への対応を含めて、マニュアルに基づき、身体拘束をしないケアを実践している。日中は玄関の施錠はしておらず、職員は、利用者の離脱傾向を把握、見守り等を行うと同時に、近隣のガソリンスタンドにも声を掛けるなどの配慮を行っている。	

R7.1自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待について勉強会を実施している。わかっているような基本的なことでも、毎年繰り返すことで意識できるようにしている。介助の仕方や声の掛け方など、全体的又は個別に振り返りができるように話しをしている。管理者は少しでも気になることは本部に報告し、手遅れにならないように対策をとるようにしている。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	事務所、玄関に資料を準備している。市や地域包括支援センターに相談したり、成年後見制度を利用されている方もおられたため勉強になった。積極的に理解を深めようという努力が必要だと思っている。	成年後見制度の利用者があり、そのやり取りや研修を通して、職員も認識を深めている。相談があった場合に備えて、事業所にパンフレットなどの資料を常備しており、行政につなげる体制は整っている。	関心のある家族や、利用開始時から状況の変わった家族がいる事も考えられ、運営推進会議のテーマに取り上げたり、家族との連携、コミュニケーションの一つの話題にしたりして、簡単に制度を再度紹介してみてもいいかなと思います。家族も、制度の理解と同時に、事業所に対する信頼を深める事になるものと思われます。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、時間をとってわかりやすく説明している。見学・入居決定後、入居までの打ち合わせをするときにも詳しく説明している。料金や加算・体制などの変更時は全員に説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月に1～2回ほど、診察の報告を電話で行っている。その時に日ごろの様子なども伝えるようにしている。面会のタイミングで直接説明することもある。ケアプランを見直す際、入居者・家族に聞き取りをしており、聞き取り方はその人にあわせて工夫している。	利用者の願いや要望等(外出など)には、日々のかかわりの中で聴取を行い、迅速な対応につなげている。また家族には、受診の状況を含めた近況報告を郵送、もしくは電話連絡を行って意見を求め、面会時や電話などによって意向を伺う機会づくりに努めている。意見箱も設けている。家族からの意見は記録と同時に定例会議にて報告、職員間で情報を共有している。	利用者や家族からの意見や思いの吸い上げにも前向きではあるが、家族の満足度アンケート調査の実施や、家族会の開催を検討してみるのはいかがでしょうか。反応を受け止める事で、さらに職員の認識と、利用者(家族)とのコミュニケーションが高まるのではないかなと思われ、期待したいところです。また、家族とのやり取りの中で、LINEやメールを利用すると、既読の確認ができたり、写真や動画まで添付できたり、というメリットもあるかなと思いますので、ご検討されてはいかがでしょうか。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員と1対1で話す機会を設けている。また、それ以外でもいつでも話しかけるような雰囲気作りをしようと話し合っている。	月1回の定例会議の会議や、随時の個別面談において、職員は意見や気付き等何でも言える環境にある。また管理者はそれを積極的に運営に取り入れ、必要に応じてフィードバックを行う事で、職員の意欲にもつなげており、信頼関係を築いている。離職は最小限に抑えていて、職員が交替する時の引継にも十分時間を取っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は管理者や職員に声掛けして、話しやすい雰囲気作りにつなげている。環境面などの相談も直接できるようにしている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢・性別などを理由に排除することはない。10代～70代の職員が働いている。介護経験などは関係なく、人にやさしく接することができる職員が自信をもって長く勤めることができるよう工夫している。技能実習生や特定技能の職員も増え、個性豊かなおもしろい職場となっている。	採用選考において、人柄や特技などの持ち味を重視、性別や年齢等を理由に対象から排除する事はない。10～70歳の幅広い年代の職員が働いている。特定技能実習生など、外国籍の方も4名おり、入職後のスキルアップ、研修への参加、資格取得の支援、希望休の取得にも前向きで、安心して働ける職場環境での安定したサービス提供につなげている。日頃より職員休憩室にて十分な休憩時間が取れている。	介護ロボットを導入したが、活用できず本部に返したと聞く。ケアの効率化や、職員の負担軽減につながるものは、利用を前提に、大いに検討していただきたいと思います。

R7.1自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	これまで長い人生があることを知り、ひとりひとりの生活歴や性格なども含めて対応を工夫している。 少なくなってきたと思うが、入居者からの部落差別などの発言などについて、関係性が悪くならないように対応している。また、明治～昭和の時代についても知るように努力している。	事業所内にて倫理研修を行っており、管理者が中心となって職員全員が、利用者一人一人のその人らしさを大切に受け止める支援の実践に取り組んでいる。職場内でのハラスメントなどの雇用上の問題がないよう、管理者は注意している。	内部での研修の他に、外部研修に参加した職員による伝達研修を充実させたり、あるいは行政による講師派遣やDVDなどを活用した勉強会などを行う事により、さらに全職員が認識を深められる事を期待します。
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員ひとりひとりの性格や得意な事、苦手な事などを把握し、得意なことは伸ばしていくようにしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルス流行により勉強会参加などの機会が激減してしまったが、案内を貼り出したり、直接声をかけたりしている。管理者は特に、施設や病院へ行くことができるようになり、交流が戻りつつある。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に面会をしている。本人からの聞き取りでは、何も困りごとはない、と言われることが多い。環境や様子から探ることもある、また家族からこれまでの生活歴や性格、現在の様子などを詳しく聞き取ることで、困っていることや要望などが見えてくる。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に関する問い合わせの時点から、これまでの様子や悩みなどを拾い上げるようにしている。家族の体調や生活に配慮することでお互いが気持ちよくやりとりができるよう意識している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族とじっくり話しをするようにしている。入居希望で話しをすすめていても、求めていることがグループホームではない場合は、他のサービスをすすめることもある。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中でできることはしていただくよう意識している。入居者から、何かさせてと言われることも多い。 毎日職員が忙しくするのはなく、一緒にやっていくことを意識できるようにしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の様子をこまめに報告するようにしている。職員が対応できないことは相談して協力を得ている。面会や外出、外泊の機会も増えてきて、家族の力もプラスになって支援できている。		

R7.1自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族構成以外に、聞き取り可能な範囲で関係者を確認している。面会は問題なければ、家族以外にも来ていただくことができる。隣組からの面会や友人、昔お世話になったからと言う方の面会もある。	職員は、利用者の馴染みの場所や人について家族を通して把握しており、知人が訪問をしたり、受診やドライブの際に思い出の場所を通ったり、といった支援を行っている。身内に美容師がいて、昔カットしてもらったことを思い出しながら、今はグループホームで髪を切ってもらっている利用者がいる。なかなか返信はできないが、馴染みの人々から、手紙、写真、年賀状、クリスマスカードなどが届くのを楽しみにしている。利用者が築いてきた関係やつながりを継続できるよう支援に努めている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配慮や、会話ができるように間に入ったり、入居者同士にまかせたりと、その場の様子で臨機応変に対応している。八女市は広範囲であるが、入居したら近所の方がいたということもよくあり、途切れていた関係が再開することもある。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も連絡をすることが多い。家族から経過の連絡を受けることもある。近隣のお店で買い物中に会って話すこともよくある。入居者の配偶者や子どもなども高齢であることが多いため、退居後も気にかけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントは日頃関わりが多い介護職員が作成している。聞き取りが困難な場合は、日ごろの表情やこれまでの生活歴、性格などよく把握できているため、色々な意見があがってくる。	利用者の思いや意向については、会議などを通して、なるべくそれが叶えられるように、また職員の間で共有できるように、居室担当職員を中心に共有に努めている。記録は、独自のアセスメントシートを使用している。日々の利用者の言葉や行動、仕草、表情などから、意思疎通が困難な方も含め、本人本位の支援を行っている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前、入居時に詳しく聞き取りを行っている。聞き取りができなかった部分は入居後も聞き取りを続けて、少しずつ情報を増やしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出勤時は全体の申し送りを確認するようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者本人と、家族のことは、介護職員がよく把握できているため、入居者担当を持ち、中心になって必要なことを話し合うようにしている。	独自のモニタリング表を使用、担当職員が作成した案に、カンファレンスで話し合われた事、日々の記録、利用者や家族の要望や意見などを含めて、責任者が「その人らしさ」を重視した介護計画としてまとめている。見直しの都度本人および家族への説明を行い、署名をもらっている。計画の内容は職員が共有、支援項目についての実践状況を毎日チェックする事で、日々のケアに活かしている。	

R7.1 自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	今まで、ケアプランのチェックと1日の記録が1枚にまとまっていた用紙を使用し、手書きしていたため、1日の全体的な記録が見て確認できていた。タブレットを導入して以降、全体的な記録がパッと見て確認できず、不足している部分が多かった。日勤帯と夜勤帯でそれぞれに1日の記録を振り返る時間を設けて、必要な記録ができるよう改善している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ケアプランに沿った支援が基本ではあるが、途中で意向がかわっているのかな、と気づいたり、この方にこのサービスは必要・不要が見えてきたりするので、その都度意見をだしあうよう意識している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	生活歴や性格、関係者などを把握し、入居後も役割や楽しみが続くように考えている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医の指定はしていない。施設の所在地から医療機関まで遠いことが多く、急変時などを考慮し、こちらから訪問診療を提案することがある。入居者からの希望で、入居後しばらく経って、主治医の変更をしたこともある。	利用開始にあたり、訪問診療も行っている医療機関へ、かかりつけ医を変更するケースが多い。それ以外の場合は、基本的には家族が医療機関にお連れするが、その際も家族から聞いた内容等を申し送り簿に記入するなど、情報の共有を心がける。訪問歯科の受け入れもある。適切な医療が受けられるような支援を行っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日頃の様子をよく把握できているのは介護職員なので、なんとなくいつもと様子が違うと感じたら、ためらわずに相談するということを意識している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族や病院の担当者と話し合いをしている。入院中、家族や病院の担当者と経過を確認しながら、退院時期や今後について話し合いをしている。病院とは、入退院の受け入れ以外に、病院の勉強会に参加したり、入居の相談を受けたり、日ごろから関わりが多く、お互いが相談しやすい関係となっている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期について指針を整備している。入居日に説明や、その時の意向を確認している。その後は、体調変化時やケアプラン更新時に、かわりないか確認している。 重度化すること、看取り介護がどうということなのか理解しづらいため、事例などを用いて詳しく説明している。	重度化・終末期のケアについては、事業所内での医療行為はできない事も考慮して、改めて事業所が家族や主治医と協議して判断する。方針や状況を確認、共有したうえで、利用者や家族にとって最善と思われる環境の中で、最大限の支援を行っている。昨年2名を看取っている。定期的に研修を行っているうえ、職員に対して、看取り介護後のアンケートを行い、看取りについての振り返りや今後の課題について話し合う機会を設けている。	

R7.1自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会に取り入れている。過去に数回、心肺蘇生が必要になったこともあるため、通常の勉強会では実践につながりにくと感じ、消防署に相談して、応急救護訓練を取り入れている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回避難訓練を実施している。地震や水害を想定した訓練も含んでいる。 年に2回の訓練では身につかないことが多いため、毎月の職員会議で、入居者の誘導確認をしている。 また、避難訓練前後の職員会議では、火災が起きる原因を探ったり、振り返りをしたり、訓練をするだけで終わらない様にしている。	災害対策マニュアルが作成され、年に2回の避難訓練を実施(消防署の協力のもと、夜間も想定。また近くに川があって、かつて実際に避難した事もあり、水害も想定する)している。訓練の中で避難経路や役割分担の確認、消火器の使用方法的の説明も行っている。運営推進会議と同日に開催することで、地域住民の参加も見られている。AEDやスプリンクラーの設置の他、非常用備品・備蓄の準備や期日管理、連絡網の整備など、災害に備えて万全を期している。	実際の災害時に、各利用者を居室から避難させたら、居室入口の札をひっくり返すことで、避難漏れのないようにしている、との工夫がなされているが、職員は安全と効率の両面でさらに最良の方法がないか、と模索しているところがあり、ぜひ検討を続けていただきたいと思います。 また、地域で訓練が行われているようであれば、前向きに参加していただきたいと思います。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室に入るときは必ずノックをして、ひと呼吸おいてドアを開けるようにしている。また、居室不在時には勝手にはいらないように、確認をとるようにしている。 トイレのドアは必ず閉め、介助に入るときもノックして入るようにしている。 排泄の介助を受ける気持ちを充分理解して、その気持ちに配慮できるように、必要時ミーティングで話しをしている。	利用者の人格を尊重し、誘導や声かけを穏やかに行うよう心がけている。プライバシーを損ねない対応については、会議の中でも検討し、実践に結び付けている。写真の活用(敬老会の際に渡すアルバムや、職員が製作するDVDなど)に伴う個人情報使用に関する同意書(念書)あり。守秘義務についての認識は職員間で共有している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ひとりひとりの理解力や判断力にあわせて対応をかえている。質問の仕方もひとりひとりにあわせている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活のリズムが乱れない様に、食事時間は決めている。起床時間や就寝時間はそれぞれ違う。おおまかな1日の流れがあるが、その中で、自由に過ごされている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴準備は本人にまかせている。出来ない方は、一緒に選んだり、好みを考慮したり工夫している。朝、化粧をして出てきたり、家族が好む服を持ってきたりということが笑顔につながっている。お正月や敬老会行事などのときは、いつもよりおしゃれしてもらっている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	朝は職員の手作りで、昼夕は業者からとりよせている。敬老会や正月、誕生日などは特別食を職員手作りで提供。おやつの見直しを行い、動き出している。 食器洗いやお盆拭きは入居者が主となり、している方を見て、周りの方もやる気が起きるなど良い影響が広まっている。	かつては3食とも手作りの食事を提供していたが、コロナ禍以降は、朝食はそのままだが、昼・夕食はチルド食を注文、加熱をして提供(ごはんや汁物は事業所で調理する)している。食事の制限や形態、ある程度の嗜好などにも柔軟に応じられる。誕生日、敬老会の日などの行事の際には、対象利用者の希望を参考にして、事業所で調理する。月3回は朝食にパンを提供、クロワッサンは評判が良い。利用者も食器洗いやお盆拭きなどに取り組んでいる。	チルド食とはいっても、焼き直すなど、ひと手間加えている。食事の時間が楽しみでわくわくするような、喜ばれる食事の提供を、これからも継続していただきたいと思います。

R7.1 自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	塩分控えめを基本としているが、おいしいと思える味付けを意識している。おやつは、スナック菓子などを減らし、改善している段階。水分がなかなか摂取できない方は、1回の量は少なくとも、1日の摂取量を増やすために何回も提供している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを基本にしている。できることを見極めて、自分でしてもらったあとに仕上げ介助をしたり、全面的に介助をしたり、対応をかえている。口腔ケアの重要性を伝え広げているが、実践につながっていないので、ステップアップしたい。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄を基本としている。入居前はオムツを使用されていたが、トイレでの排泄が可能となり綿パンツに変更したこともある。だんだんと尿とりパットが必要になってくる方も多いが、自分で交換しやすいタイプを選んだり、失禁用パンツを準備してもらったり、ひとりひとりの排泄の様子にあわせて検討している。	トイレは1ユニットに5ヶ所あり、車いすでの介助もしやすい。排泄チェック表を利用し、一人一人のパターンを把握、職員間で情報を共有し、それに応じたさりげない支援を行っている。利用者の表情や仕草などを察知して、早めに対応する事で本人の自信につなげている。尿意のない方についても定時に誘導を行い、トイレで失敗がなくなった、というケースや、おむつ等が軽い物に移行できた事例につながり、排泄の自立に向けた適切なケアが行われている。転倒の注意が必要な利用者など、個別の対応も行き届いている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	緩下剤が必要な方が多いため、緑茶以外の飲み物やバナナ、ヨーグルトなど効果がある物は取り入れるようにしている。生活のリズムが乱れない様に、朝の起床と夜間の就寝は大事に考え、体操、立ち上がり運動、歩行運動など毎日とりいれている。運動は意欲的な方が多い。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回の計画。入浴したくない方は、週の始まりから計画し、予定を変更しながら週3回入れるように工夫している。曜日や時間は診察や体調などで変更している。	週3回をめやすに、一人ひとりの状況に即した入浴の支援を行う。気持ちが和らぐように会話をするなど、入浴が楽しくなる工夫を行う。拒まれる際には声の掛け方や時間を変えたりして、無理強いはいしない。手すりの設置、脱衣場の床暖房などの配慮も見られる。職員は、入浴が全身や皮膚などの状況、体調などを観察する機会とも受け止めている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居後、少しずつリズムを整えるように支援している。朝は、カーテンを開けて陽を浴びてもらい、晴れた日は日光浴をして、夕方以降はだんだんと照明をおとしている。夜間のテレビ視聴についても工夫している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	施設内で薬局が管理しているが、薬情報は必ず確認するようにしている。薬局からのコメントも随時受けており共有できるようにしている。薬が変更になったら、しばらく観察して効果を報告できるように意識している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族からの手紙や電話、面会は大変喜ばれる。面会時間の設定はしているが、希望時間にあわせることも多い。仕事や家事、子(孫)育ての経験から、それにつながる役割や楽しみを探っている。		

R7.1自己外部評価表(グループホーム春の山) 確定

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の希望を叶えることは難しい。コロナウィルス流行以降、外出や行事など消極的になってしまったが、少しずつ内容を見直しながら実施できるようになってきている。外出・外泊は体調を崩すことにもつながることが多く、心配してしまうが、制限せずに希望を受けている。	コロナ禍が落ち着きが見られ、少しずつ外出に目を向けられるようになった。毎日の散歩も、時には「土曜日」まで足を延ばすこともある。花見(黒木の藤や、桜、コスモスなど)のドライブには利用者や家族の希望を考慮する。家族による外出も支援する。中庭で体操をしたり、お茶を飲んだりして、外気浴により季節を感じてもらっている。今後も、利用者の気分転換や、普段出掛けられない所へ行く事での充実感を図る取り組みを前向きに検討している。	家族が個別で利用者を外出にお連れするのを支援する他、事業所での外出の際にも、家族や地域の方々に声掛けをして、協力を仰ぐのもよろしいかと思います。
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金や印鑑などは所持しないように入居されるときに確認をしている。少額持たれている方もいる。お小遣いを金庫に預かっており、外出先で使えるようにしている。孫にお年玉をあげたいから、と相談にこられることもある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持たれている方が増えている。使用方法がわからなくなって来られている方もおられるので支援している。春の山の電話で話されることもある。手紙や年賀状が届くととても喜ばれる。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭は陽当たりがよく過ごしやすい。気候が良いときは、中庭で体操やおやつを提供している。建物は道路沿いではあるが、騒音被害はない。トイレのドアが2枚扉で、開閉に大きい音が鳴ることがあり気になっているが、出入りしやすくするための工夫がされているため、職員はゆっくり開閉するように意識している。	ゆったりとした開放感のある空間で、利用者は居心地よく過ごしている。普通の家庭にも見られるインテリアや調度類に加え、カーテンやクロスは落ち着いた色合いを使用し、家庭的な雰囲気大切にしている。畳の上がりのスペースがあり、また通路は歩行訓練にも適している。季節感の漂う作品が掲示されている。不快なおいなどはなく、室内の温度、湿度、照明や音量などにも注意をしている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	全員一緒に過ごす時間もあるが、居室でテレビや昼寝、景色を眺めるなど自由に過ごされることが多い。入居者同士で居室の行き来も多い。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	タンスやソファ、仏壇など持ってこられる方が多い。布団なども新しく準備せず使い慣れた物を持ってこられるように伝えている。入居の日、荷物搬入されるときは家族がレイアウトなど色々工夫される方も多い。	居室には事業所の設備として、ベッド、電灯、カーテン、エアコン、収納は備え付けてあり、ぬいぐるみやテレビ、位牌を持ち込んだり、作品や写真などを飾ったりするなど、使い慣れた家具や寝具が使用されている。かつては居室(洋間)に畳を敷いて和風にする方もいたと聞く。それぞれに個性が感じられ、職員も安全なレイアウトや掃除を心掛けていることもあって、本人が快適に過ごしている事が想像できる。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	わずかな変化で混乱される方も多い。できるだけ環境をかえないようにしている。ひとりひとりの動きや理解力などを把握して、環境整備に努めている。2ユニットの行き来ができるので、自由に行き来していただけるように、薬剤などを保管している場所は施錠して安全面に考慮している。		